石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第423号　平成31年1月1日発行

石川県立美術館開館35周年　石川近代美術の100年

高光一也《秋》
石川県立工業高等学校蔵

新春優品選【前田育徳会・古美術・工芸・絵画・彫刻】

現代日本の書家たち

- 文化財現地見学報告
- 秋篠宮さま文化財保存修復工房を視察
- ミュージアムレポート
- アラカルト ただいま 展示中
- 1月の行事予定

第7·8·9展示室

石川県立美術館開館35周年

石川近代美術の100年

主催：石川県立美術館　後援：北國新聞社、北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、北陸朝日放送

1月4日（金）～2月4日（月）　会期中無休

前号では石川近代美術のあゆみを、三部構成とし、美術館収蔵の絵画・彫刻作品を中心にたどると述べました。今回は、各時期について概要を述べます。

明治期

明治の前半は、欧化主義と国粋主義が交錯し、十年頃までの美術界は日本画の凋落が著しく、洋画が勃興するのですが、じきに「洋画を志すものは国賊」とまでいわれるような反動期が二十年代半ばまで続くことになります。二十二年開校の東京美術学校（現、東京藝術大学）は絵画科は日本画のみ、彫刻科は木彫のみと、洋画や洋風彫刻を学ぶことはできませんでした。石川県では、二十年に開校した金沢工業学校（現、石川県立工業高等学校）を中等の美術教育機関として、数多くの俊才を東京美術学校に送り込むのですが、同様に洋画や洋風彫刻は学べません。欧化と国粋がバランスをとるようになるのは三十年代以降となります。

こうした時期、明治十五年の内国絵画共進会には垣内雲嶙や中浜松香、鈴木華邨など石川ゆかりの日本画家が出品し、二十二年に洋画家が結成した明治美術会には、得田耕や佐々木三六などが加わっています。彫刻では明治初期に村上九郎作や相川松濤ら木彫家が活躍し、二十年代後半以降、工業学校に赴任した白井雨山、板谷波山らによって、洋風彫刻がもたらされました。そして四十年に石川で開かれた東京美術学校の卒業生、在校生、教授らによる東京美術学校郷友会展は、以後定期的に開催され石川の美術界に刺激を与えることとなります。

大正から昭和前期（終戦まで）

東京美術学校郷友会展は、日本画、洋画、彫塑、工芸、図案の各分野の総合展で、大正期には二、六、九、十四年、昭和に入ると四、八、十二年とほぼ四年おきに開かれました。日本画では北陸絵画協会を中心に青々会、六耀会などのグループが結成され、洋画では北日本洋画会展が大正二年に開かれ、四高洋画会や光絃社などの団体が活動しています。大正期の中央美術界はヨーロッパからの美術動向、フォーヴ、キューブ、抽象、シュールレアリスム等が帰朝者によってもたらされ、活性化した時期です。中央展で活躍する石川ゆかりの作家も出てはいたのですが、多くは東京を活動の場としました。しかし、十二年の関東大震災によって石川に戻った作家達は微温な郷里の美術界に不満をおぼえ、在住の作家達と呼応して、翌十三年、日本画と洋画部門による金城画壇を結成したのです。以後、昭和十八年の第二十一回展まで公募展を開催し、石川画壇の中心的役割を担うことになります。

彫刻では県内に金城画壇に相当する組織は見られませんが、県立工業学校を経て東京美術学校で学んだ吉田三郎を中心に津賀田勇馬や松田尚之らが文展・帝展で活躍し、後進の刺激となりました。

◆関連行事

◇講演会

日時　一月二十六日（土）
　　午後一時三十分～　聴講無料

演題　「明治維新と金沢の美術工芸」

講師　本康宏史 氏（金沢星稜大学教授）

◇学芸員によるギャラリートーク

一月六日から毎週日曜日　午前十一時～

松田尚之《想》昭和17年

北野恒富《三味線》大正10年

◆観覧料　※（　）内は20人以上の団体

一　般	600円	（400円）
大学生	500円	（300円）
高校生以下	無料	

※コレクション展示もご覧になれます。

前田育徳会尊経閣文庫分館

新春優品選

会　期：1月4日（金）～2月11日（月・祝）
会期中無休

今回は、新春優品選として新年を祝うにふさわしい作品を選びました。最初は、幕末の加賀藩御用絵師・佐々木泉景による《寿老・鶴図》です。泉景は旭日や鶴などの吉祥図を数多く描いており、本作もその一環として制作されたものと考えられます。今回の特集では、正月休みに全国から来館されるお客様のために、鐙、鞍、兜などの武具も展示します。いずれも意匠や技法などに、文武二道を強く打ち出した加賀藩主・前田家ならではの創意が発揮されています。続いて、元から明時代の漆芸と青磁を展示します。室町時代以来、唐物の優品を所有することは大名家にとって自家の格式を表明する重要な手段でした。今回展示する作品は前田家のコレクション全体から見れば、必ずしも中心的なものではありませんが、こうした水準のものを数多く所持していた事実から、前田家の格を理解することができます。

最後は再び絵画です。今回は、吉祥図として岸駒の代表作といえる《松下飲虎図》をはじめ、六代梅田九栄による《鷹狩図》から「冬の巻」や、周文の作と伝わる《秋冬山水図》など季節に相応しい作品を選びました。そして冬から春の息吹を感じていただきたく、結城素明や鏑木清方の作品も選びました。フランス印象派による光の表現は、この両者をはじめ日本の画家にも大きな影響を与えました。今回は、その印象派の先駆的な作品としてブーダンの《洗濯婦図》もあわせて展示します。これらの近代絵画は、前田家十六代・利為が収集したものです。

《松下飲虎図》岸駒

学芸員の眼

戦後の石川美術界の復興は素早く、まず二十年に財団法人石川県美術文化協会が設立され、旧北陸海軍館を美術館として第一回の現代美術展が開催されました。日本画・洋画・彫刻・工芸の四部門からなり、十八日間で三万九千人という多くの入場者をみたのです。当時の文化に関する飢餓状況が伺えます。美術館はすぐにＧＨＱにより接収されたのですが、文化協会は美術学校の創設を提起し、二十一年に金沢美術工芸専門学校（現、金沢美術工芸大学）が開校します。

二十年代末以降三十年代全般にかけ、日本の美術界を抽象美術が覆いましたが、本県も同様に、抽象を手がける作家が多く見られます。具象美術の復権は四十年代以降となりますが、具象は県民性に適っているのでしょうか、金沢美大卒業生を中心に多くの公募展やコンクールで受賞するようになり、現在に至っています。

森本仁平《湖畔のはす田》
平成7年

第2展示室【古美術】

新春優品選

会　期：1月4日（金）～2月11日（月・祝）
会期中無休

第2展示室では、新春にふさわしい古美術作品を、絵画・陶磁器・染織品等から十五点紹介します。

新年を祝う宴に欠かせないお酒の神が、猩々です。赤い髪に赤い顔の猩々は、しばしば美術品の題材となっています。狩野常信の《七人猩々図》は、表情豊かな七人の猩々が雪の降りしきる中、大きな盃を笠のように持ちながら、軽妙に歩く姿を描いたものです。猩々は能の演目にもなっており、シテは赤髪に赤い装束という「赤づくし」の出立となります。用いられる専用面は能面「猩々」で、ほんのりと赤い肌と、少し笑みを浮かべた表情が印象的です。

久々の展示となるのが、加賀市の菅生石部神社所蔵の《水仙模様縫箔小袖》（加賀市指定文化財）です。全体に水仙と唐花模様を散らした小袖で、これらは刺繍と疋田絞りの技法で表されています。同社は用明天皇元年（五八五）創祀と伝え、江戸時代には加賀藩前田家も崇敬を寄せました。この小袖は十一代治脩の室法梁院の寄進と伝えられています。

最後に、野々村仁清による《色絵梅花図平水指》（重要文化財）を紹介します。仁清といえば、鮮やかな色彩の絵画的模様が特徴で、水指の周囲をぐるりとめぐらすように梅の老樹が伸びています。梅の花は赤だけでなく金と銀も用いられ、幻想的な世界を生み出しています。

本特集ではその他、狩野尚信の《柳鷺図屏風》（石川県指定文化財）、能装束《色変鶴菱模様唐織》なども紹介します。

重要文化財《色絵梅花図平水指》野々村仁清

第3・4・6展示室【絵画・彫刻】

新春優品選

会　期：1月4日（金）～2月11日（月・祝）
会期中無休

第3、4展示室では、開催中の企画展「石川近代美術の一〇〇年」にちなみ、その後の石川美術を概観します。

日本画では日展など団体展を舞台に、現在も活躍中の作家を紹介します。昭和四十七年、西山英雄が金沢美術工芸大学日本画科教授に就任すると、京都画壇とのつながりが密接になりました。その系譜である百々俊雅、仁志出龍司らには西山の影響を認めることができます。西山一門ではありませんが、金沢美大を卒業し、日展の中心的作家として活躍する中村徹《貌》からは岩絵具のマテリアルを再認識させられることでしょう。

洋画では団体展を中心に活躍する作家も多く、中でも二紀会で活躍する朝倉雅子、二科会の五味祥子、一陽会の沢オイ等、女性作家の活躍も注目されます。また、団体展から離れたところに身をおき、カボチャというミニマムな中に宇宙を見いだす能島芳史、他におもねることを知らない三浦泉のリアリズムなど、孤高の制作も目が離せません。

彫刻分野では、戦後石川県の彫刻界を牽引してきた、金沢美術工芸大学の教員とその卒業生の作品を中心にご紹介します。開設当初の教官である矩幸成の《泉お汲む》、昭和二十六年に教授に就任した松田尚之の《人魚》などの具象作品を中心に展示します。また、金沢美術工芸大学を卒業し、同大教授に就任した得能節朗、清水良治、長谷川大治郎、畫間弘などの作品もお楽しみいただけます。

中村徹《貌》

第5展示室【工芸】

新春優品選

会　期：1月4日（金）～2月11日（月・祝）
会期中無休

新春を迎えるにあたり、近現代工芸の名品の数々をご覧いただきます。本稿では、竹田有恒《萌黄釉裏金彩蔦文鉢》にみられる釉裏金彩技法についてご紹介します。竹田は能美市（旧根上町）に生まれ、京都の川尻七平窯で修行後、金沢市本多町で開窯します。釉薬と金彩による玉虫色の再現に生涯を捧げ、昭和三十六年に釉裏金彩の技法を完成させます。竹田の釉裏金彩の特徴は、漆芸技法である平文をヒントに考案したことにあります。釉薬の原料を混ぜた漆を磁器素地面に塗り、金箔や金粉を蒔いた後、特殊なヘラを用いて金を掻き落として大まかな絵柄を表現します。掻き落とした金を再び素地面に蒔き、絵柄にぼかしを加えて奥行きを表現します。素焼きにより漆の成分は燃え尽き、金だけが素地面に融着されます。この一連の工程を繰り返し、最後に透明な釉薬を全面にかけて焼成することで深みのある美しい金彩の表現が生まれます。

竹田は、正倉院の宝物に使われている平文技法から釉裏金彩技法の着想を得ました。平文について理解するため、重要無形文化財「蒔絵」保持者である大場松魚に目前で技法を披露してもらったそうです。今回の展示では、大場松魚《平文千鳥盛器》も展示されていますので、あわせてご鑑賞下さい。この他にも、抹茶碗を中心とする茶道具や友禅、金工、木竹工の各分野から優れた作品を展示します。どうぞ美術館で、新春のひとときをお過ごし下さい。

竹田有恒《萌黄釉裏金彩蔦文鉢》

第6展示室【近現代書】

現代日本の書家たち

会　期：1月4日（金）～2月11日（月・祝）
会期中無休

当館の近現代書作品には、昭和三十年代半ばに開催された「現代日本書道の名家」展をきっかけに、当館所蔵となった作品が数多くあります。

第二次世界大戦後の日本は、社会状況が劇的に変貌し、新しい芸術思想が書の世界にも流れ、大きな変革期を迎えました。机上の実用のものから、美術作品へ。作品発表の場である展覧会が美術館を会場として開催されるようになり、昭和二十三年の第四回日展に初めて書部門が参加することになります。この時以来、漢字、仮名、篆刻など古来の伝統を踏まえた書に、絵画、彫塑とともに美術としての意識が吹き込まれたのです。それに伴い表現形式も壁面の高い美術館で鑑賞される作品へと発展、額装が主流となり、作品も次第に大型化していきました。

長い歴史を持ち、脈々と受け継がれてきた「漢字書」の歴史に向き合い、古代文字を素材に表象芸術として挑む青山杉雨らは、古代文字による変化に富む、豊かな表情の作品を生み出しました。また、手島右卿らは、文字を一から二文字に限定し、時には淡墨を用いて文字の造形性を強調した少字数の書（大字書）を誕生させ、鑑賞される書を追求していきました。そして、日本で誕生し、平安時代に美の頂点を極めたかなの世界においても、時代の要請により帖や巻子の机上から、迫力とともに品格を備えた大字かなの作品が生まれていきました。

このような会場芸術として「書とはなにか」という問いを持ちながら、幅広く、豊かに広がってきた現代書のあり方を追求する動きは、今も続いています。

青山杉雨《独嘯》

第49回 文化財現地見学報告

美濃尽し

平成30年10月20日(土)・21日(日)実施

「美濃尽し」というテーマに沿って、岐阜県を訪れました。今回は野外での見学もあったので、天候にも恵まれひと安心しました。

洲原神社では宮司さんからご案内をいただきました。白山信仰と関連の深い境内を見学しました。そののちバスで清泰寺へ移動し、金森宗和作の庭園や滅多に拝見することのできない寺院の中を見学しました。駐車場からかなり歩きましたが、貴重な文化財に癒やされるひとときでした。次にお昼を挟み、荒川豊蔵資料館へ。企画展「可児の人間国宝～志野・瀬戸黒、昭和三十年の快挙～」と豊蔵の居住空間を拝見しました。最後に可児市郷土歴史館へ行き、解説を聞きながら、美濃焼を含め可児市の古窯や遺跡について知見を広げました。

翌日は、朝から元屋敷陶器窯跡へ向かいます。窯跡の大きさに圧倒されました。次に訪れた多治見市美濃焼ミュージアムでは、詳しい解説を聞きながら、美濃焼の古代から現代まで幅広い作品と陶片を鑑賞しました。最後は、お昼を挟み、岐阜県博物館へ。こちらで企画展「信長・秀吉・家康と美濃池田家―大御乳・池田恒興・輝政の戦い」などを鑑賞し、戦国時代の岐阜県について多くの知識を得ることができました。

皆さまのおかげで、この度も大きなトラブルなどないまま、無事に終えることができました。ご応募・ご参加いただき、ありがとうございました。

元屋敷陶器窯跡にて

秋篠宮さま文化財保存修復工房を視察

第六十三回水族館技術者研究会へ出席のため来県された秋篠宮さまは、十一月二十七日に石川県文化財保存修復工房を視察されました。中越一成石川県文化財保存修復協会代表の案内により、野々市市・荒川神社所蔵の野々市市指定文化財「賤ヶ岳合戦図絵馬」や、富山県射水市・(一財)高樹会所蔵の重要文化財「石黒信由関係資料」、石川県立美術館所蔵の墨蹟の修復を見学されました。絵馬では、実際の修復に入る前の損傷状況を詳細に記録する調書作成作業を、「石黒信由関係資料」では古文書の虫食いの繕い作業を、墨蹟では剥落止め作業をご覧いただきました。

秋篠宮さまは、中越代表の説明に耳を傾けながら、熱心にそれぞれの作品を興味深く眺めて、「燻蒸は何を使っていますか。」、「この文書一枚の繕いにどのくらい時間がかかりますか。」などのお尋ねがありました。中越代表は、「防虫処理の方法のお尋ねなど、修復に関する高い知識をお持ちで驚きました。『大変なお仕事ですね。』とお言葉をいただいたことがとても印象に残りました。」と感想を述べています。また、「この絵馬は紙を何枚継いでありますか。」、「剥落止めは文字の部分だけですか」など、修復作業にあたった川口法男技術責任者や梶青華技師に直接お尋ねになるとともに、ねぎらいと励ましのお言葉もいただきました。

ミュージアムレポート　鑑賞＆体験講座

やきものの絵付けに挑戦！

平成30年11月11日（日）実施

十一月十一日（日）、九谷で絵付けを学んだ洋画家、中村研一はじめ硲伊之助や吉田冨士夫、そして、中川一政らの手がけた陶芸作品をご覧いただく「画家とやきもの」展で、九谷焼の絵付け体験のワークショップを行いました。

午前は、中学生以上の一般の方の部、午後は小学生親子の部です。どちらの部でも展示室を会場にした作品鑑賞からスタートし、担当学芸員からの作品解説や、焼き物の作品からその作家の絵画の作品を当てるクイズ形式のワークシートで作品に関心を持っていただきました。

後半は、能美市の九谷焼陶芸館のご協力のもと、いよいよ皿への絵付け作業です。一般の部では九谷五彩の和絵の具、午後の小学生親子の部は、七色の洋絵の具を使用しました。洋絵の具は、絵付けをした時の絵の具の色がそのまま焼き上がり、完成作品がイメージしやすい作業です。しかし、和絵の具の作業は、絵付け時の絵の具の色が、焼き上がりとかなり異なりますので、完成の色をイメージしながら絵付けを行っていきます。また、呉須で輪郭を描いた線の上には、必ず絵の具をつけていくこと、また、その作業では絵の具は〝塗る〟というより〝のせる〟という作業を進めます。

慣れない作業も含まれましたが、その分、自分の作品がどのように仕上がってくるかも、お楽しみ！の活動でした。

展示室での解説

絵付け体験

平成三十年度文化財保存修復工房セミナー「料紙に学ぶ」

◆第三回文化財保存修復工房セミナー（聴講無料）

講師　本多俊彦氏（金沢学院大学准教授）
演題　文書料紙入門：紙から歴史を読み解く
日時　平成三十一年二月十一日（月・祝）午後一時三十分から三時
会場　石川県立美術館ホール

◆第四回文化財保存修復工房セミナー（聴講無料）

講師　湯山賢一氏（神奈川県立金沢文庫長）
演題　我が国における料紙の歴史について（仮題）
日時　平成三十一年三月十日（日）午後一時三十分から三時
会場　石川県立美術館ホール

1月の行事予定

■「石川近代美術の一〇〇年」記念講演会　午後1時30分～　美術館ホール、聴講無料

26日（土）「明治維新と金沢の美術工芸」
講師　本康宏史 氏（金沢星稜大学教授）

■映像ギャラリー　午後1時30分～　美術館ホール、聴講無料

6日（日）「日本の巨匠　松田尚之」（15分）
「美術のみかた　洋画と日本画」（25分）

20日（日）「日本の巨匠　西山英雄」（15分）
「高光一也　自作を語る」（15分）

■土曜講座　午後1時30分～　美術館講義室、聴講無料

12日（土）「国宝の話あれこれ」　学芸第一課長　谷口　出

19日（土）「石川の油絵一〇〇年」　普及課長　二木伸一郎

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.34

《八百屋之図》やおやのず 縦173.0cm×横85.5cm 大正3年(1914)

紺谷光俊 こんたに・こうしゅん 明治23年～昭和20年(1890～1945)

襷に前掛けの女性と、白いエプロンの少女が品物のやりとりをしています。女性の指にかけられた帳簿に「大正三」との文字が認められるので、そこから時代背景を辿ってみます。

大正三年は、第一次世界大戦が勃発した年です。日本は参戦国ながら、国土が戦場とならずに済み、空前の大戦景気を迎えました。本作にも豊富な品物が陳列されています。特に当時の占領地台湾から移入された貴重品のバナナや、贅沢にも小豆を緩衝材にした卵の陳列が目を引きます。

二人の身なりに目を向けると、少女がエプロンの下に着込んだ華やかな羽織は、裕福な暮らしぶりを暗示。八百屋の女性は、絣の羽織に草履ですが質素な感じは受けません。むしろ当時流行の束髪ではない日本髪に、清楚な印象さえ受けます。

少女が履く爪皮つきの高下駄が雪模様を、おせち料理に使うクワイや吊された羽根突きの羽子が年の瀬を伝え、正月を迎える喜びが滲み出ています。本作は、後に美人画家として郷土で知られた紺谷光俊の、若き日の佳作です。

余談ですが、小学生にこの絵を見せると、少女が八百屋の店番をしているという答が多く、「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」の証左といえるでしょう。

※企画展「石川近代美術の一〇〇年」にて展示中。

次回の展覧会

平成31年2月15日(金)～3月20日(水)

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第２展示室
天神画像と文房具	古九谷・再興九谷名品選

第4展示室	第3・6展示室	第5展示室
彫刻と人	優品選【絵画】	美術館でお花見

ご利用案内

コレクション展観覧料

一　般　360円(290円)
大学生　290円(230円)
高校生以下　無料
1月の「コレクション展示無料の日」はありません。

1月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00

1月の休館日は
1日(火)～3日(木)

広告
「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか？
石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ
郵送配布!! 3,000部発行
ターゲットを狙った 知名度向上
県立美術館発行の 信頼度の高い広報媒体
お問い合わせは ☎092-716-1401
株式会社ポープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q－Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第423号〈毎月発行〉
2019年1月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/